

第30回ICM（国際助産師連盟） プラハ大会に参加して

著者	井關 敦子, 新小田 春美
雑誌名	三重看護学誌
巻	17
号	1
ページ	65-69
発行年	2015-03-20
その他のタイトル	Participate in the 30th ICM Triennial Congress, Prague
URL	http://hdl.handle.net/10076/14682

第30回 ICM（国際助産師連盟） プラハ大会に参加して

井關 敦子, 新小田春美

Participate in the 30th ICM Triennial Congress, Prague

Atsuko ISEKI and Harumi SHINKODA

1. はじめに

2014年6月上旬、第30回 ICM (International Confederation of Midwives・国際助産師連盟) 大会がチェコ共和国(通称チェコ)の首都プラハで開催された(写真1)。ICM大会は世界各地で3年に1度開催され、世界中の助産師が集う学術大会である。基調講演をはじめ、母親と子ども、その家族へのケアについて、科学的な実践や革新的な取り組みについて数多く発表され、助産師同士が親睦を図る交流の場となっている。今回の大会は前回の南アフリカ大会(ダーバン)で選出されたフランシス・デイ・スターク(イギリス)会長、デブラ・ルイス副会長(アメリカ)の指揮のもと準備されてきた。

ICM所属協会は、4つのブロックに区分されており、私達が大会に参加した6月時点では、アジア太平洋(19

か国・23協会)、アメリカ(15か国・17協会)、ヨーロッパ(36か国・43協会)、アフリカ(31か国・32協会)の、102か国の地域・116協会が加盟していた。日本は日本看護協会助産師職能委員会、日本助産師会、日本産科学会の3つの会員協会が加盟している。

ICMの活動方針として、2015年までの達成目標である国連の「ミレニアム開発目標」を掲げている。全ての妊産婦と新生児に安全・安心な助産ケアを提供するために、国際基準を政策や国家の保健医療サービスに確実に反映できるように、助産師のための世界共通の実践能力と基準が検討されてきた。今回は前回のダーバン大会で採択されたICMの主要な活動方針(教育、規則、職能団体の強化等)に関する世界の実施状況と課題を評価することが大きな目的であり、3日間の concurrent, symposium, workshop plenary lecture など117セッション、ポスター4セッションなどが企画されていた。3,700人以上の参加者があり、日本は世界第3位の演題数が受理され、またポ



写真1 オープニングセレモニー



写真2 宿泊したホテルにて(筆者ら)



写真3 ヴァーツラフ広場



写真4 ドヴォジャークの墓標

スター発表数では第1位とのことであった。私達は、ポスター発表とともに教育講演等にも参加したが、世界の助産師の意気込みに圧倒され、子どもを産み育てる女性の目線、それをサポートする家族・助産師の活動、女性の生き方を考えさせられた学会であった。6日間の慌ただしい行程ではあったが、学会を通じて知ることができたチェコの助産師活動の紹介と合わせて、世界遺産の街での見聞を報告する。

2. チェコ共和国の紹介

1) 基本情報

チェコは中央ヨーロッパの共和制国家であり、面積78,866m²で北海道をやや広くしたほどの国土である。人口は10,562,214人(2011年)で、チェコ人がほとんどを占める¹⁾。1チェココルナは約5円(2014年4月現在)、主要産業のひとつはガラス製品製造で、愛らしい動物の置物や壮麗なカットガラスが観光客の目を惹きつけていた。私達が出かけた6月のプラハの平均気温は15.7℃(東京21.4℃)で、朝夕は長袖があると便利な位の気候であった。

2) チェコの歴史・プラハの印象

宿泊したホテルの目前には、目抜き通りの「ヴァーツラフ広場」が広がる(写真3)。1968年、旧チェコスロバキア時代におこった民主化運動「プラハの春」では、この広場を旧ソ連の戦車が埋め尽くしたとのことである。「プラハの春」は実ることなく鎮圧されたが、自由を求める機運はその後、1989年の無血の「ビロード革命」につながり、共産党体制は崩壊した。「ヴァーツラフ広場」はその時にも舞台となった歴史的な場所である。チェコは、革命を率いたのち大統領となった劇作家ヴァーツラフ・ハヴェルはじめ、スメタナ、ドヴォジャーク、フランツ・カフカ、アルフォンス・ミュ



写真5 プラハ城

シャを輩出した、文化と芸術の香り漂う国である。私達は、ドヴォジャークの墓標を見つけるため、学会会場から徒歩でヴィシェフラッド墓地にも足を伸ばした(写真4)。また、プラハ最大の見どころであるプラハ城は町全体を見下ろす丘に建ち、現在その一部は大統領の執務室ともなっている(写真5)。

プラハは、ユネスコ世界遺産に登録された1000年の歴史をもつ都市であり、ロマネスク建築から近代建築まで各時代の建築様式が並び、ヨーロッパの建築博物館の街といわれる。プラハ市内をウルタヴァ(モルダウ)川が悠々と流れ、ここがかつて東側の社会主義国であったとは信じられないような美しい街である。何度もの戦争被害を奇跡的に免れたおかげで、中世から続く美しい町並みは現代に受け継がれ、世界中から訪れる観光客を感動させる。クラシックな建物はアールデコ調の美しいレリーフで装飾され、町全体をさらに

美しくしている。しかし、メインストリートから側道に入ると、数人の男性の物乞いがうつろな目で座り、観光客の慈悲を待っている。地下鉄でプラハ本駅まで足をのばすと、美しく修復された駅のホールに出迎えられる。対照的に殺風景な駅舎の外壁は朽ち、ジャポニズムの影響を受けたであろう花魁風のレリーフがその壁を飾り人々を見下ろす。

地下鉄、バス、トラムは共通のチケットで乗車できるうえ料金も安く、これで経営が成り立つのかと心配になるくらいである。しかし現地にも長く暮らすガラス工芸品店の日本人店員は、「以前はもっと安かったのに」と不満顔である。チェコは内陸国のせいかレストランのメニューには肉料理が多く、鱒などの魚料理は少ない。料理は十分な量で安価であるが、生鮮野菜不足の印象を受ける。社会主義国時代は、今よりもさらに野菜の流通が少なかったとのことである。

3. チェコ共和国の医療事情

1) 住民からみたチェコの出産・育児事情

現地で私達をサポートしてくれた愛知県出身の通訳 A 氏は、チェコ人男性と結婚し現在育児中である。住民の立場から、チェコの出産や育児事情について大変興味深い話を聞かせてくれた。産科医療は集約化されているらしく、妊娠の初覚があればかかりつけの産婦人科を受診し（初診料 150 コルナ；約 750 円）、そこで日本の母子健康手帳に相当するものを受け取り、歯科、心電図、尿検査、糖尿病のスクリーニング、血液検査等を受け、妊娠中期頃まで受診する。超音波検査は有料（80-90 コルナ；約 400～450 円）で、妊娠末期になると分娩施設を選択し、そちらに受診施設を変更し分娩を迎える。医療保険に加入していれば分娩費用は無料で、病室料金のみが有料（約 100 コルナ；約 500 円）となる。経膈分娩であれば、40%程度は無痛分娩を選ぶとのことである。入院期間は日本よりも短期間で経膈分娩は 2-4 日、帝王切開は 1 週間程度で退院可能である。帝王切開で分娩した A 氏は、入院中に病室の清掃担当者から「いつ退院するの？」と頻りに聞かれたことから推測すると、早期退院が推奨されている様子である。退院後は 1-2 週間健診等の産後ケアも提供されている。

チェコでは、就業していれば保育園や託児所への入所は優先的に認可され、待機児童はほとんどなく、女性の職場復帰も非常にスムーズとのことである。A 氏が居住する集合住宅の 1 階には小児科の開業クリニックがあり、乳幼児健診もそこでなされる。共産圏時代

表1 チェコの保健指標¹⁾

平均余命	男性 75.1 歳 女性 81.2 歳 (2012 年)
粗出生率 (対人口 1000)	10.40 (2011 年)
合計特殊出生率	1.46(2013 年)
乳児死亡率 (対出生 1000)	2.7 (2010 年)

の名残もあり、医療費はほぼ無料、公立であれば小学校から大学まで授業料は無償、しかし税金は 21% と高い。育児休業は 3 年取得可能で妻の代わりに夫が取得することも可能で、通訳業に復帰した A 氏も夫が育児休業を取得中である。このように、医療・福祉が充実し男性に依存する必要がないためか、チェコの女性は発言権が強く離婚率が高いとのことである。

2) 助産師活動の実態

近年、東欧では、自宅出産を介助した助産師に対し刑事罰が科せられるなど助産師への抑圧があった²⁾。日本では、一定の条件をクリアすれば家庭でも開業助産所においても助産師による正常分娩の介助は合法である。しかしチェコでは正常経過であっても、助産師が家庭で分娩介助することはもちろん、開業助産所での分娩介助は困難な状況である。病院と全く同じ施設や条件を備えていない限り、開業助産師による分娩介助は違法である³⁾。また、異常発生時には 5 分以内に産科医が到着できる条件が備わっていることが必要で、非常に厳格な条件が求められる。この状況について、後述するシュザナ・シュトロメロヴァ氏（助産師）は、「助産師は分娩経過が異常であれば直ちに病院に紹介搬送するのだから、開業助産師に病院と同じ条件を求めるのは不可能で無意味である。」と述べている³⁾。日本と同様に、チェコでもほとんどが施設（病院）分娩であるが、この国では産婦の承認なしに会陰切開や医療介入がなされ、母子分離され、産婦の意思が尊重されることは稀とされる。家庭分娩は 3%（2005 年）とも推測されるが³⁾、保険は適用されず自費診療となる。それでも自宅分娩を選択する女性もいることから、チェコの助産師は、たとえそれが違法であっても、倫理感と責任感のため分娩に立ち会わざるを得ない状況があると考えられる。また、自宅出産を望む場合、都市部では助産師を確保できるが地方ではそれが難しく、法律とは別の問題がある。世界中の様々な国で、女性は助産師の立ち会いなしに出産せざるを得ない現状がある。しかし、チェコは先進工業国であるにも関わらず、



写真6 コウノトリ出産の家

これらの国とは違う事情のために助産師不在の自宅分娩を選ぶ実態がある。

4. 施設見学

1) 「コウノトリ出産の家 (Birth House Stork)」

「自然でフレンドリーな中での出産を」という声を受け、1998年「コウノトリ出産の家」(写真6)が前述のシュザナ・シュトロメロヴァ氏(写真7)を中心に設立された。しかし、家庭分娩や助産所での分娩介助といった助産師の職域拡大は困難な様子であり、現在、この施設の分娩部門は機能しておらず、妊婦健康診査と産後ケアのみである。

見学当日の説明資料(Midwifery in the Czech Republic)によると、2012年のチェコの出生数は108,000人、人工妊娠中絶は22,174件、帝王切開率は25%(周産期医療センターでは40%)で、年間約1400名の女性が自宅出産したと推測され、その多くは大学教育を受けた高学歴女性である。チェコの助産師教育は8年間の基礎教育のうえに様々な養成ルートがあり大学院教育もなされている。約6,500人の助産師登録があり(約60人は独立開業、約15人は家庭分娩をサポート)、4つある助産師団体の1つ(チェコ助産師連盟)がICM(国際助産師連盟)に加盟している。

2) 「母子ケアセンター (Institute for the care of Mother and Child)」

「母子ケアセンター」はプラハにある産科・生育医療を専門とする医療機関で、ウルタヴァ(モルダウ)川岸のヴィシェフラッド城跡の敷地内に立地する。1918年の開院以来、療養所や軍事病院として機能し、理学療法科、整形外科および外科、婦人科が同敷地内に設立され、その後1948年に新生児病院も設置された。1955年には産婦人科および新生児病院が統合し、母子



写真7 シュザナ・シュトロメロヴァ氏(左)

ケア研究所も設立され厚生省の研究機関となった。研究所として活動を開始してからの数年間はプラハの出生率も高く年間分娩件数は3,000件以上あり、現在はさらに増え4,500件以上となっている。

また「母子ケアセンター」はハイリスク妊娠の取り扱いを専門とする周産期医学センターとしての地位を確立して以来、様々なケースを取り扱っている。私達は、全体説明のあと靴カバーをつけ病棟を回り、手洗い後NICUに入室し、カンガルケアやクベース収容児の治療管理を見学した。NICU全体は、クベースとその周辺機器が一体となったような壮大な設備となっており、生産工場ラインの中にいるような感覚を覚えた(写真8)。日本でもNICUは医療機器に囲まれてはいるが、それでも医療機器はハイテクですっきりしたラインで稼働している。母性ケアセンターはdevelopmental careを唱えてはいるが、現実とのギャップや日本との設備の違いに、私達は驚きを隠せなかった。しかし、面会に来て治療児を抱く父母は、見学者の日本人を寛大に受け入れて下さった。そのことに私たちは感謝の気持ちでいっぱいであった。

5. 学会参加を終えて

本学会は、それぞれの国の事情を超えた共通の女性や母子の健康やその教育上の問題について、状況を把握し助産師が連携し助産ケアの提供を考える機会となった。またグローバルなパートナーとして助産師同士の親交を図り、貴重な時間を過ごすことができた。

本学会での演題は非英語圏の受理率が低いことから、演題受理は研究の質よりも言語の壁に阻まれている可能



写真8 母子ケアセンター（NICU）



写真9 母子ケアセンター（ナースステーション）

性を、ICM プラハ学術委員の大石氏は指摘している²⁾。また、ポスターが大多数とはいえ、日本は世界第3位の演題受理国であることから、「日本の助産師や研究者はもっと自信をもって口演にチャレンジしては」と、同氏は勧めている。今回はポスター発表であったが、興味をもって話しかけてくださる方もあり、言語の壁に尻込みせずこれからも挑戦しなければという思いを強くした。言葉の不自由さに悔しい思いをしながら、場の雰囲気だけはしっかりと受け止めることができた学会でもあった。

また、今回の大会はチェコの助産師活動の実態を知る機会ともなった。チェコの状況は、「女性は自分が望む出産場所を選択する権利がある」「助産師の立ち会いは安全で不要な医療介入を軽減させる」というWHOの勧告を無視しているとも言える。チェコの産婦の利益と助産師の職域拡大のために、今回のICM大会が契機となることを願う。

喜ばしいことに、2015年7月のICMアジア大会の開催地として横浜が決定した。横浜大会は、アジア圏の助産師の交流を図れるとともに、世界に誇る日本独自の細やかな助産ケアを発信できる機会となることであろう。

引用文献

- 1) <http://www.indexmundi.com/facts/czech-republic> (2014.9.20)
- 2) 日本助産学会ニュースレター(2014), No.73, 一般社団法人日本助産学会
- 3) Lazarova D.:Czech midwives claim they are not allowed to do their job, 16-05-2007
(<http://www.radio.cz/en/section/curaffrs/czech-midwives-claim-they-are-not-allowed-to-do-their-job>)(2014.9.20)

参考文献

- 1) Konigsmarkova I.(2012):Home birth in Czech Republic, *Ceska Gynecol.* 77 (6), 558-562
- 2) Midwifery competencies in home birth in Denmark and the Czech Republic STSM, Cost Action Childbirth, Culture and Consequences (http://www.iresearch4birth.eu/iResearch4Birth/resources/cms/documents/J_Clausen_STSM_Report.pdf)(2014.9.20)

